

知的障害特別支援学校における恋愛に関する学習の実践的研究

和歌山大学教育学部附属特別支援学校 鶴岡尚子

西本一史

瀬戸有香

和歌山大学教育学部 谷口知美

1. はじめに

これまで附属特別支援学校では、「性」を人間らしく、自分らしく生きるための人権の一つと考え、二次性徴や妊娠についての狭義の性教育ではなく、人間関係やジェンダー、多様性、性暴力の防止なども含めた包括的な性教育を行う必要があると考え、卒業生へのインタビュー調査や授業づくりに取り組んできた。また、本校では、狭義の性教育と差異化するため、包括的な性教育をセクシュアリティ教育と呼んでおり、昨年度は本校での研究での成果として、セクシュアリティ教育の和附特モデルを作成した。

その中で、未だ実践の蓄積が不十分であったのが、恋愛に関することである。高田・郷間・牛山(2017)は、全国の国立大学附属学校特別支援学校に勤務する小学部から高等部の教諭を対象とした質問紙調査により、過去に知的障害児への恋愛や交際をテーマにした授業を実施した経験のある教諭は全体で約3割と少ない状況であったと報告している。そして、授業の実施を阻害する主な要因は、「児童生徒の発達段階の個人差が大きいため、学習展開の難しさがあることや、ノウハウがないこと」(p.38)であった。ここからは、「恋愛」はこれまで十分に授業実践が行われてこなかったテーマであることが分かる。そのため、在籍する生徒たちの実態に応じた、将来を見据えた恋愛の学習を検討する必要があると考え、養護教諭と担任教師が連携しながら実践に取り組んだので報告する。

なお、授業の計画段階では養護教諭と担任教師が意見交換しながら内容について検討し、実際の授業実践に際しては主に担任教師が主指導を担った。

2. 目的

知的障害特別支援学校の高等部において恋愛に関する授業実践を行い、その成果と課題を整理する。

3. 対象

和歌山大学教育学部附属特別支援学校の高等部1年生の5名である。このクラスは全員が内部進学生であり、自閉スペクトラム症、また、知的障害の程度が軽度から中度の生徒たちが在籍している。

4. 実践

【年間を通した恋愛の授業のねらい】

- ・ 関係を深めるための具体的なステップが分かる。
- ・ 自他の権利を大切にしたい人間関係の築き方が分かる。
- ・ 他者と関係を築くことに前向きな気持ちをもつ。

以下に、今年度の授業の計画と実施日、授業のタイトルを示す。

授業計画

実施日	内容	備考
①5月9日	恋って何？	中3生徒5名と一緒に
②6月27日	生物としての「オス」「メス」～性交～	高等部Fコースの1～3年生
③12月19日	友だち以上、恋人未満	
④2月20日	恋人について（予定）	

現時点では、3回分の授業を終えており、その様子について報告する。

授業①『恋って何？』

生徒の中には、恋や恋愛をした経験がない者もいる。そこで、1回目の「恋って何？」の授業では、恋をしたことがない生徒にもイメージが伝わるように、教師の恋の実体験を伝えた。そこで留意したことは、恋はしてもしなくてもよいという前提に立つことである。恋をする気持ちは自然ではあるが、決して恋をしないことが不自然というわけでもない。ただ、もし生徒たちが今後、恋する気持ちをもった時には、その気持ちを前向きに受け止めて欲しいし、恋する自分に気付き、わくわくする気持ちや恥ずかしい気持ちなど、色々な感情を楽しんで欲しいと考えた。また、恋をすることで、人に優しくしようしたり、相手の気持ちを考えようしたりすることにも繋がり、それは自分自身の成長にも繋がると期待できる。

そこで、教師は、自身の恋の始まりの経験を語り、生徒たちはそれを聞きながら、その時々、恥ずかしさや楽しさ、何とも言い表せないもよもよした気持ちなど、色々な感情に触れられるようにした。

生徒たちは、普段聞くことのない教師の恋の話に関心をもったようで、笑顔を浮かべながら静かに聞いていたり、質問を投げかけたりしていた。一方で、恥ずかしそうにしていたり、よく理解できないといった様子の子供も見られた。よって、恋の経験のない生徒にとっては、自分事として考えることは難しかったかもしれないが、他者の気持ちに触れる機会として、授業の意義があったと思われる。

授業②『生物としての「オス」「メス」～性交～』

性交についての理解は、デートDVや性暴力を回避すること、そして自分の生き方について考えることに繋がる重要なポイントであると考えている。そこで、生物の授業の延長として、鮭の受精や、動物の交尾の動画や映像を提示した。そこから、人間はどのようにして受精するのだろうかという問いを掛けたかけたのであるが、多くの生徒が想像できないようであった。そこで、養護教諭から、男女の内性器の仕組みや月経と射精、受精の仕方について自作の教材を用いながら説明をした。少し恥ずかしそうな様子の生徒も見られたが、大部分の生徒は新たな知識の一つとして受け入れていたように見えた。

ただ、人間にとって性交の意義は生殖だけではない。「生殖を目的としない、パートナー間の同意を前提としたコミュニケーションとしての性的なスキンシップを「ふれあいのセックス」(伊藤、p77)と言う。授業においては、生殖に限らないセックスの伝え方のいかなる工夫ができるのか、検討していく必要がある。

授業③『友だち以上、恋人未満』

この授業では、友だち、恋人という言葉に着目した。これまでは恋という実体のないものについて話をしてきたが、「人」を話題にすることで生徒たちがより具体的なイメージをしやすいのではないかと考えたからである。

最初に、「友だち」とはどんな人のことと考えるかを問いかけると、「〇〇くん(さん)とは、あまり話をしないから、友だちとは言えないなあ。」という生徒もいれば、同じ学校に在籍していたり、過去に面識があったりするだけで「〇〇くん(さん)は、友だちです。」と言い切る生徒もいるなど、捉え方には個人差があった。しかし、それぞれがイメージする「友だち」を確認することができた。

続けて、「友だち以上…っていうことは？」という発問に、「親友」や「友だち」の中でも、「1番の…」や「大切な…」など、「以上」という位置付けの人をイメージすることができていた。その後、「恋人」という言葉を出したが、「好きな人」や「特別な存在」などの言葉と同時に、「相手も好きでいてくれている」などの考えも聞くことができた。この授業の中で、生徒たちは、恋人と友だちの違いを意識することが出来たと考えられる。

授業④『恋人』 ※今後実施予定

「恋人」をテーマに授業をする時に、ありがちと思われるのが、「みなさん、今、好きな子はいますか?」、「ここで言わなくてもいいので…」という問いかけである。ところが、これまでの教師の経験から、「言わなくてもいいので…」などと言ったところで、生徒たちの中では恥ずかしさが先行し、発言をためらう傾向があるように思われる。しかし、授業③で、「友だち以上、恋人未満」の授業を行ったで、「恋人」という言葉を過剰に意識することなく、自分の考えを発言できるようになると期待している。この授業の中で、一人一人の理想とする相手に思いを馳せることを通して、将来への期待感を高めたいと考える。そして、生

徒たちが抱く「恋人」のイメージや願望などを把握し、さらに次の段階の授業を検討したい。

ここでもう一度、留意している点について述べる。毎時間大切にしていることは、先にも述べたが、恋を全員が経験するものであることを前提としないことである。好きな人がいてもいいし、いなくてもいいということを、授業の所々で伝えながら進めていきたい。そうすることで、恋に興味がなかったり、恋の経験のなかったりする生徒も、不安な思いを持たずに授業に臨めるようにしたいと考えている。

5. 実践を振り返って

現時点で実践した、授業計画のうちの3回までを報告した。残りの授業を今年度中に実施予定である。その様子については、追って報告したい。

ここまでの授業では、教師が一方的に話すのではなく、生徒との対話を重視し、生徒たちが恋や恋愛についての経験や感じていることを自由に表現できる雰囲気作りを心掛けてきた。そのような中で、生徒たちの恋や恋愛の経験と、憧れる気持ちの度合いなどが多様であることが分かってきているが、ほとんどの生徒が特定の人と付き合った経験がないことも事実である。そういった生徒たちにとっては、恋や恋愛を自分事として捉えることは難しいかもしれないが、そういった実際の経験がないからこそ、メディアを通して触れたことをそのまま行動の指針として内面化してしまう可能性もあり、実際の恋愛において相手の真意を汲み取れなかったり、自分の基準に基づいた言動を押し通してしまったりするような問題も予想される。このクラスの生徒たちにとって、恋や恋愛について学ぶことは、理解できる感情の幅を広げることや、自他の権利を大切にしながら人間関係をつくることに繋がると期待している。続く実践でも、知的障害のある生徒たちの恋愛に対する思いや考え方を把握し、将来も見据えたセクシュアリティ教育のあり方を検討していきたい。

文献

伊藤修毅（2020）『ゼロから学ぶ障害のある子ども・若者のセクシュアリティ』全障研出版部

高田千鶴、郷間英世、牛山道雄（2017）「知的障害児への恋愛や交際をテーマにした授業の実施状況とその規定要因の検討—国立大学法人附属特別支援学校の教諭を対象とした質問紙調査から—」『学校保健研究』Vol. 59 No. 1、pp28-39